

# ランスロット “ケイパビリティ” ブラウンがニューナム・コートニーの テムズ河畔に作庭した自然風風景式庭園について

松 平 圭 一\*

Lancelot “Capability” Brown’s Riverside Landscape at Nuneham Courtenay in Oxford:  
Mason’s Flower Garden, Heveningham Hall Garden, and Nuneham House Garden

MATSUDAIRA Keiichi\*

## Abstract

This paper considers Lancelot “Capability” Brown’s riverside landscape at Nuneham Courtenay in Oxford and puts it within the context of a growing mega trend for the English natural landscape garden in the second half of the eighteenth century. Particular attention must be given to I. the 1st Earl of Harcourt’s natural landscape garden and the 2nd Earl of Harcourt’s flower garden, II. the walled garden at Heveningham Hall garden, and III. Brown’s riverside landscape at Nuneham House garden. These remarks would contribute to understanding of Brown’s work on creating the riverside landscape at Nuneham Courtenay.

**キーワード** : 英国式自然風風景式庭園, ニューナム・コートニー, ヘニンガム・ホール

**Keywords** : English natural landscape garden, Nuneham Courtenay, Heveningham Hall

大学都市オックスフォードの郊外ニューナム・コートニーに邸宅を構えたハーコート伯爵家は、自然由来の不規則、変化、多様という特性を基に色彩設計を組み合わせて、今日の英国式庭園の礎となる庭園様式を確立させた。この点において、ハーコート伯爵家は、英国庭園史に特筆されるべき貢献をしたといえる。

具体的には、初代ハーコート伯爵(the 1st Earl Harcourt, 1714-77)は18世紀英国に独自の庭園様式を確立させた造園家ウィリアム・ケント(1685-1748)とその弟子ランスロット・‘ケイパビリティ’・ブラウン(1716-83)に収斂される、ピクチャレスク性と大規模なランドスケープ性を兼備した作庭を実践した。(図1)

一方の第二代ハーコート伯爵 (George Simon Harcourt, the 2nd Earl Harcourt, 1736-1809) は、ピクチャレスク美を提唱したウィリアム・ギルピン(1724-1804)の美意識理論を熟知したウィリアム・メイソン(1725-97)を介して、英国式自然風風景庭園の様式に色彩を加えるという英国庭園史上初めてとなる作庭を試みている。

このように、英国庭園史においてハーコート伯爵家は二代にわたって重要な足跡を残した。ところで、第二代ハーコート伯爵は、所謂「メイソンの花園」(図2)によって、現在にまで至る英国式庭園の歩みを確立させたことで評価されている。しかし、興味深いのは、1778年に第二代伯爵が造園家ランスロット・‘ケイパビリティ’・ブラウンを招聘して

\*理工学部共通教育群教授 Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

いることである。

第二代伯爵がブラウンを招聘したのは、邸宅敷地内西部に広がるテムズ河畔を英国式自然風風景庭園に改造するためだった。そしてこの作庭は、ブラウン自身の業績において晩年に分類される。元々初代伯爵が作庭させた風景式庭園は、英国式自然風風景庭園の起源と深く関わっていた。英国式自然風風景庭園は、造園家ウィリアム・ケントやその弟子のブラウンによって確立された英国独自の庭園様式に他ならない。そうした庭園様式を確立させたのは、17世紀以来英国が培ってきた「観察と経験」に裏打ちされた自然観であった。

英国独自の自然観の系譜は、バッキンガムシアにあるストウ庭園の庭園装飾建造物「英国名士聖人廟」を例示すれば十分だろう。ベイコン、ミルトン、ニュートン、ジョン・ロック、ポープを祀った英国名士聖人廟は、英国が確立させてきた自然観の系譜を視覚的にあらわしている。

またウィリアム・メイソンは、「英国式庭園」(1772-81)と題した長詩第一巻でミルトン、ウィリアム・テンプル、ジョセフ・アディソン、ケント、フィリップ・サウスコウト、ウィリアム・シェンストン、ブラウンを挙げて、英国式自然風風景庭園の成立と展開の系譜を示している。

このように英国式自然風風景庭園は、英国独自の文学思潮や美意識論が庭園様式と有機的に結び付き結実した。

そして、副次的にこの庭園様式を支えた要因として指摘されるのが、「グランド・ツアー」を通じて膨大に英国にもたらされたニコラ・プッサン、クロード・ロラン、サルバトーレ・ロザなどの17世紀イタリア・フランスの風景画である。その多くは、ギリシア・ローマ神話を題材にしたものであった。それらに描き出された自然風景には自然が持つ不規則性、変化性、多様性が大胆に描き込まれていた。そしてこれらはそのまま英国式自然風風景庭園の構成要素になったのである。

初代ハーコート伯爵自身、こうした影響を直接的に受けたグランド・ツアー経験者であった。修学旅行としてのグランド・ツアーから1734年20歳で帰国するまで、初代伯爵はイタリアを中心として多くの学びを行っている。この影響があって、1760

年頃にポール・サンドビー(1731-1809)が描いたニューナム・コートニーの邸宅とその周辺部分には、イタリア風景画を思わせる趣が漂うことになった。

(図3)

メイヴィス・ベイティもその様子を“The 1st Earl’s landscape with formal clearings and aligned vista is Italianate scene” (Batey 23).と述べて、その様子が規則性を排除し、両側に木々を配したなかで眺めを得るイタリア風景画的なものであったことを指摘している。

そののち第二代ハーコート伯爵は1778年にブラウンを招聘した。エドワード・ハイアムズは“Perhaps it was Mason who suggested calling in Brown to transform a landscape...” (Hyams 98)と述べ、ブラウンが招聘されたのはメイソンの推挙があったからであろうと推測している。

メイソンとハーコート伯爵家との関わりは、敷地内に作庭された「花園」に始まった。花園は、ジャン・ジャック・ルソーに心酔し薫陶を得たニューナム卿(のちの第二代ハーコート伯爵)が強く作庭を希望したことによって造られるに至っている。初代伯爵がニューナム卿に花園の作庭を許可したのは1768年のことであった。

先に述べたように、元々初代伯爵はイタリア風景画由来の自然風風景式庭園を造っている。そのためケントやブラウン同様に、庭園から花木による色彩を完全に排除した緑一色の作庭をした。

当然のことながら、初代伯爵は花園について好印象を持つことはなく、ニューナム卿に様々な注文をつけたことが今日までに明らかになっている。1772年初代伯爵は、ニューナム卿から提出された設計案に様々な書き込みを行った。初代伯爵によって変更が加えられた設計案に対して、メイソンはニューナム卿から意見を求められ、その出来栄の悪さを酷評している。(松平 87) これからのちメイソンが様々な助言をニューナム卿に与えて、花園は漸く完成をみたのであった。

メイソンがブラウンを推挙したのは、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ学寮の庭園改造案に伴い、同校教授ジョン・マナリングに知遇を得ていたことに起因している。この点についてハイアムズは、

It may well, incidentally, have been

Capability's friendship with Mainwaring that led to his friendship with Mason, the poet-gardener who sprang to his defense against Chambers with Heroic Epistle, for Mason himself was another of the professor's circle of friends. It is possible that Capability first met him at Church Stretton. (Hyams 80)

と述べ、マナリング教授を介してメイソンとブラウンに友情が芽生えたことと、造園家ウィリアム・チェンバーズ(1723-96)が行ったブラウン批判に対して、メイソンが *An Heroic Epistle to Sir William Chambers* (1773)によってブラウン擁護の論陣を張ったことの2点を指摘している。

チャンバーズは *A Dissertation on Oriental Gardening* (1772)を通じて、ブラウンの作庭を「面白味なく洗練されていない」(“insipid and vulgar”)と批判した。チャンバーズに端を発したブラウン批判はその後もやむことはなく、1790年代にはリチャード・ペイン・ナイトやユードル・プライスといったピクチャレスク派によって継承され、ブラウン没後にも続いている。

こうした批判に対して、ブラウンは存命中一切の反論をせず沈黙を守った。ハイアムズは、ブラウンに代わってメイソンが擁護論を出した背景にはマナリング教授を介して芽生えた友情があったと見ている。

しかし、実はメイソンが第二代ハーコート伯爵にブラウンを推挙して、直ちにブラウンが邸宅敷地内の庭園改造に着手できたわけではなかった。ハイアムズによれば、第二代伯爵は建築家ロバート・アダムとブラウンにコンペティションを実施し、庭園と邸宅に関する改造案を提出させている。その結果、建築家ヘンリー・ホーランドが邸宅を含めた建築全般を担当し、ブラウンが庭園改造全般を担当するというブラウン案が採用されたのだった。

ニューナム・コートニーでブラウンによって実施された改造の特徴は、自然そのもののようなランドスケープを確立したこと、ピクチャレスク的な要素を残したこと、そしてメイソンの花園を排除しないでブラウン自身の庭園と共存させたことの3点である。

第二代伯爵がホレス・ウォルポールとジョシュア・レイノルズと執筆した *Description of Nuneham Courtenay* (1806)によれば、ブラウンが作庭したテムズ河畔の自然風風景式庭園は、邸宅敷地の総面積1200エーカーのうち38エーカーほどの広さであった。ベイティによれば、ブラウンによるテムズ河畔の敷地への改造は、

The whole scene is so idyllic and seemingly uncontrived that as Whitehead pointed out in “The Late Improvements at Nuneham”, it is difficult to see which is Brown and which nature. (Batey 23)

となっており、造られた風景は極めて田園牧歌的で自然そのものようであり、どこがブラウンの改造で、どこが自然そのままか区分が難しいものだった。ブラウンの改造は、それほどまで巧みに行われ見事な自然風景を生み出した。

第二代ハーコート伯爵に提出されたブラウンの改造案を見てみると、テムズ河畔に「視点留め」(eye catcher)として、複数の「樹塊」(clump)が配置されているのがわかる。(図4)

その詳細は、邸宅が置かれた小山の裾に沿いながら、テムズ川が流れる南北方向に「一本、数本、数十本の塊」(赤川 34)の単位で配置され、その総数は約60か所に上っているのが確認できる。

ティム・スコット・ボルトンは、

The ground was well-drained and only needed minor contouring to achieve its ‘capability.’ Moreover the River Thames wound gently in the valley below, naturally creating a similar effect to the many serpentine lakes he had built elsewhere. (Bolton 127)

と述べ、改造予定地には河畔につきものの水はけの悪さがなかったことがわかる。さらにボルトンの指摘からは、曲折するテムズ川がブラウンの風景構成には欠かせない蛇行曲線に縁取られた湖と同等の効果を醸成していたこともうかがえる。

このようにブラウンが改造にあたった敷地は好条件を備えるとともに、改造を受けて生み出された自然風風景式庭園は、自然そのものと思われるほどの出来栄の良さを誇っていた。

次にブラウンはこのテムズ河畔改造にあたって、ピクチャレスク的な要素を残すことを容認していた。この点に関して、ベイティは、

In a backwater of the Thames by a rustic bridge to the island, a thatched lock-keeper's cottage provided picturesque charm and refreshment. (Batey 23)

と述べ、「中島」と「中島にわたる田舎風の橋」、そして「茅葺き屋根の水門管理小屋」がピクチャレスク的な魅力を醸し出していると指摘している。

これらのうち「橋」と「小屋」は、第二代伯爵へ提出されたブラウンの改造案に記されることはなかった。通常ブラウンは、自らの作庭や改造に不要なものは全て排除する。しかし、「橋」と「小屋」については、テムズ川管理の上から排除出来ずにそのまま残したものと見受けられる。

その一方、「中島」は改造案に当初から記載されていた。直前に作庭されたブレナム・パレス庭園で見られたように、ブラウンは湖を造った際に出現した「中島」(Queen Elizabeth's Island)を「視点留め」として活用している。したがって、テムズ川の「中島」(Oseur Holle)を「視点留め」に用いようとしたことは容易に推測できる。

そして第二代ハーコート伯爵は、これらを積極的に残そうとした可能性が高い。それは第二代伯爵がギルピンから強い影響を受けていたからである。それゆえ第二代伯爵がピクチャレスクの景観を残したいと願ったことは容易に想像される。

さらに注目されるのは、ニューナム・コートニーの改造において、ブラウンが1772年以来在り続けた「メイソンの花園」を排除しなかったことである。では、ブラウンがテムズ河畔を改造するにあたって、この花園を取り壊さなかったのにはどのような理由があったのだろうか。

確かにメイソンとブラウンは友人関係にあった。そしてブラウン批判のなか、メイソンがブラウン擁護の論陣を張ったという事実もあった。しかしブラウンが「メイソンの花園」を排除しなかった理由は別にあったと思われる。そしてその筆頭に挙げられるのは、「メイソンの花園」が「ブラウンの自然風風景式庭園」から完全に分離されていたということである。

1768年、初代ハーコート伯爵は第二代伯爵となるニューナム卿に邸宅近くに花園を作庭することを許可した。その際の条件は、花園が初代伯爵のイタリヤ的な自然風風景式庭園から完全に別になるようにというものだった。

「メイソンの花園」は菱の実形を基調としつつ、その輪郭は不規則に崩されていた。そして低木林がそれに沿って植えられることで、「メイソンの花園」は初代伯爵が作庭した自然風風景式庭園側から眺望出来ず、隔絶した空間となった。(図5)

さらにブラウンの改造においても、テムズ河畔の南北に延びる38エーカーの敷地で作庭が行われたことで、「メイソンの花園」はブラウンが作庭した自然風風景式庭園部分からも完全に分離された状態に置かれた。

実は、ニューナム・コートニー以後、ブラウンの作庭や改造において、「メイソンの花園」のようにブラウン自身の設計ではない庭園が残された例があった。「ヘニングガム・ホール」(Heveningham Hall)庭園である。

ヘニングガム・ホール庭園はサフォーク州ブライス盆地に位置し、オランダ商人であったジェラルド・ヴァネック卿所有であった。1781年ヴァネック卿は建築家ロバート・テイラーに邸宅の設計を、建築家ジェイムズ・ワイアットには室内装飾の意匠を、そしてブラウンには庭園の改造を依頼している。(Bolton 129)

ヘニングガム・ホールにおいて、ブラウンが提出した庭園改造計画案は2点であった。一点は「ブライス川周辺部分の改造案」(図6)で、もう一点が「邸宅周辺部分の庭園改造案」(図7)である。「ブライス川周辺部分の改造案」について、ジョン・クリフォードは、

In the more extensive area he was thwarted by the grumbles of neighbouring landowners in his wish to make a river run parallel with the main carriage drive. Eventually he created a narrow, irregular lake, filled by springs discovered in the grounds, and spanned this by an isthmus of trees instead of the more conventional bridge. (Clifford 41)

と述べている。すなわちブラウンは馬車道に沿って

川を造ろうとしたものの、周辺の土地所有者からの反対にあって、当初の改造案を断念せざるを得なかった。その結果、ブラウンは改造実施地で見つけた水源から取水し、幅の狭い不規則な形状の湖を出現させている。そして橋を架ける代わりに木による地峡を設けるなどの変更を加えたのだった。

「ブライス川周辺部分の改造案」を詳細に見てみると、ブラウンはハイドパークのサーペンタイン池や、ブレニム・パレス庭園のクィーンズ湖のような不規則な形状に蛇行する貯水をつくらうとしていたことがわかる。

特にブレニム・パレス庭園のクィーンズ湖は、ブラウンが堰を設けて川幅を広げることで出現した。そしてブラウンはこの湖にクィーンエリザベス島という中島を配置している。ヘニンガム・ホール庭園でも、これと同じ配置で中島を設けた。そしてその中島を臨んでヘニンガム・ホールの邸宅が置かれる配置も、ブレニム宮殿とクィーンエリザベス島のそれと一致している。

ブラウンは川をつくることを断念したものの、出現させた湖は改造案の川とほぼ一致したものになった。一本、数本、数十本からなる樹塊の数は一見して 100 ヶ所を超える配置となっている。これによってブラウンは邸宅前面に展開する広大な風景に視覚的な変化を与え、視点が緩慢とならないような効果を生み出すことに成功している。

しかし、ヘニンガム・ホールにおいてもっとも注目されるべきは、「邸宅周辺部の庭園改造案」である。庭園の形状は馬蹄形で、邸宅後方に整備される案となっていた。邸宅とその後方にある樹林帯部分との間には、ブラウンが常套手段とした芝地が広がり緩衝地帯を形成している。

この庭園改造案から、ブラウンが樹塊を巧みに配置しながら、邸宅後方部分にかなり深い樹林帯を設けたのが確認できる。ここから、ブラウンは意図的に眺望が利かぬように工夫していたことがわかる。そして遮った視線の奥には、「周囲に壁をめぐらせた庭」(the walled garden)が存在した。

この点に関して、ティム・スコット・ボルトンは、  
The walled garden was originally shown on Brown's plan, but without the serpentine crinkle-crankle wall in mellow

eighteenth-century brick, a feature not typical of Brown. (Bolton 129)

と述べている。すなわち、ブラウンの「邸宅周辺部分の改造案」には、当初からこの「周囲を壁をめぐらせた庭」が描き込まれていたのである。

「周囲に壁をめぐらせた庭」の形状は台形ではあるが、内部が四分割されている。庭園全体が規則性、幾何学性、左右相称性を帯びており、明らかに 17 世紀末まで英国を席卷した古典主義整形庭園の様式であることがわかる。

通常であれば、ブラウンはこうした整形庭園を取り壊し、英国式自然風風景庭園を造ったはずである。しかしブラウンは、敢えてこの整形庭園を自らが作成した「邸宅周辺部の庭園改造案」に残した。ヘニンガム・ホール庭園の「壁を周囲にめぐらせた庭」の取り扱いは、ニューナム・コートニーにおける「メイソンの花園」のそれと同じになっている。

つまり「壁を周囲にめぐらせた庭」は、ブラウンが主としたブライス川周辺部分の自然風風景式庭園から完全に分離されるとともに、「邸宅周辺部分の庭園改造案」においても、邸宅から完全に隔離された状態になっている。

ブラウンが描いた「邸宅周辺部の庭園改造案」を詳細に見ると、邸宅後方には芝地が展開し、これがそのまま樹林帯へ続き、その向こうに「壁を周囲にめぐらせた庭」が置かれる構成になっている。詳しく述べれば、邸宅と樹林帯の間には数十本単位の樹塊が 3 か所、数本単位の樹塊が 1 か所、1 本単位の樹塊が 40 か所以上にわたって配置されている。

そして注目されるのは「壁を周囲にめぐらせた庭」を囲む樹林帯である。この樹林帯は 2 本から 3 本の木の幅で構成されており、「壁を周囲にめぐらせた庭」が庭園内のどの方向からも見通せないように眺望を遮断する役割を担っている。

さらに「壁を周囲にめぐらせた庭」へ通じる園路を樹林帯の中に配置することで、樹林帯の向こうに整形庭園が存在していることを示唆するものを完全に排除している。

確かに平面図になっている改造案からは、「壁を周囲にめぐらせた庭」が存在していることが確認できる。しかしこの改造案を立面図にとらえなおすと、「壁を周囲にめぐらせた庭」の周りには樹林帯が設

けられ、それを認識することは全くできない。

この点を当時の邸宅とその周辺部分を彫り込んだ版画から確認してみると、邸宅後方部には中高木から構成される樹林帯が茂っており、その奥にあるはずの「壁を周囲にめぐらせた庭」への眺望が全く利かないことがわかる。(図 8)

このようにヘニングム・ホールの庭園での「壁を周囲にめぐらせた庭」に関するブラウンの取り扱いを見ると、主要部分となる自然風風景式庭園に影響が及ばない限り、ブラウンは敢えてそれを排除しようとはしなかった。

ニューナム・コートニーについてもこの点を確認してみたい。ポール・サンドビーは 1780 年頃に再度ニューナム・コートニーを描いている。(図 9)それによれば、ブラウンが改造したテムズ河畔を前景として、樹塊を巧みに配置した自然風風景式庭園が展開されていたことが確認できた。

この絵画ではヘニングム・ホールの版画と同じく、中央部後方に邸宅が描かれていた。平面図をもとに考えれば、本来その後方部分に「メイソンの花園」が見られるはずであるが、花園は邸宅後方に設けられた樹林帯に阻まれて眺望できない。ヘニングム・ホールの「壁を周囲にめぐらせた庭」と同じく、ニューナム・コートニーの「メイソンの花園」は邸宅やブラウンが改造を施したテムズ河畔の自然風風景式庭園からは眺望できないように工夫されている。

ベイティはその様子をメイソンが書いた「英国式庭園」第 4 巻をもとに

The shrubbery between the North terrace and the church encloses William Mason's flower-garden, described by him in Book 4 of the poem 'The English Garden'. (Batey 25)

と述べている。この指摘からも、北テラスと教会の間にある低木林が「メイソンの花園」を取り囲んでいたことが再確認される。

ブラウンは、ヘニングム・ホールの版画とニューナム・コートニーの絵画が表しているように、「壁を周囲にめぐらせた庭」や「メイソンの花園」を低木林から構成される樹林帯で囲い、主となる自然風風景式庭園から完全に分離させて、眺望できないようにした。

ブラウンの作庭例をみると、通常ブラウンは自らが構成する自然風風景式庭園から、古典主義整形庭園やその他の要素をことごとく排除した。それゆえに、ヘニングム・ホールの「壁を周囲にめぐらせた庭」やニューナム・コートニーにおける「メイソンの花園」を残したのは、晩年多忙で体調を崩していたゆえの例外だったとの見方を生んだが、それは適切ではない。

上記で述べてきたように、ブラウンは「壁を周囲にめぐらせた庭」や「メイソンの花園」を、樹塊を併用しながら樹林帯によって取り囲み、自らが改造や作庭を施した自然風風景式庭園から完全に分離させるように努めた。したがって、ブラウンは壮年期以来の自然風風景式庭園以外の要素を排除するという鉄則を維持しようとしていたことがあらためて確認できる。

だが、ブラウンがニューナム・コートニーやヘニングム・ホールで行った処理は、ハンフリー・レプトン(1752-1818)をはじめとするそれ以降の造園家らが、古典主義整形庭園の要素を部分的に復活させる呼び水となった。その後の英国庭園史を見れば、英国式庭園が 18 世紀英国式自然風風景庭園の様式を主として用いながら、色彩設計からなる境栽花壇など古典主義整形庭園の要素を混在させて今日に至ったのがわかる。

赤川 裕. 『イギリス庭園散策』. 東京: 岩波書店, 2004.

Batey, Mavis. *Nuneham Courtenay Oxfordshire: A Short History and Description of the House, Gardens, and Estate*. 1970. Abington: University of Oxford, 1984.

Bolton, Tim Scott. *A Brush with Brown: The Landscapes of 'Capability' Brown*. Dorset: The Dovecote Press Ltd., 2016.

Clifford, Joan. *Capability Brown: An Illustrated Life of Lancelot Brown 1716-83*. 1974. Princes Risborough: Shire Publications Ltd., 1992.

Hyams, Edward, *Capability Brown & Humphry Repton*. London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1971.

Laird, Mark. *The Flowering of the Landscape Garden: English Pleasure Grounds 1720-1800*.

Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999.

松平圭一. 「ニューナム・コートニーに造られた第二代ハーコート伯爵の花園」『東京電機大学総合文化研究 第 9 号』. 東京: 東京電機大学, 2011.

Stroud, Dorothy. *Capability Brown*. 1950. London: Country Life Ltd., 1965.



図1 Brown's Riverside Landscape at Nuneham Courtenay in Oxford. Personal photograph by author, 2012.



図2 Second Earl of Harcourt's Flower Garden, watercolor from *The Flower Garden at Nuneham Courtenay, Oxfordshire*; in Mary Keen, *The Glory of The English Garden* (London: Barie & Jenkins, 1989) 89.



図3 First Earl of Harcourt's Landscape Garden, oil on canvas from Paul Sandby, *Nuneham from the Lock Morning*, c. 1760, in *Paul Sandby: Picturing Britain, A Bicentenary Exhibition* (London: Royal Academy of Arts, 2009) 202.



図4 Detail of Capability Brown's Plan of 1779 for The Second Earl Harcourt in *The Flowering of The Landscape Garden* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1999) 321.

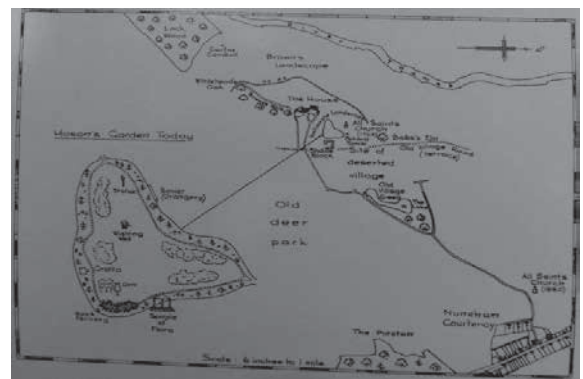
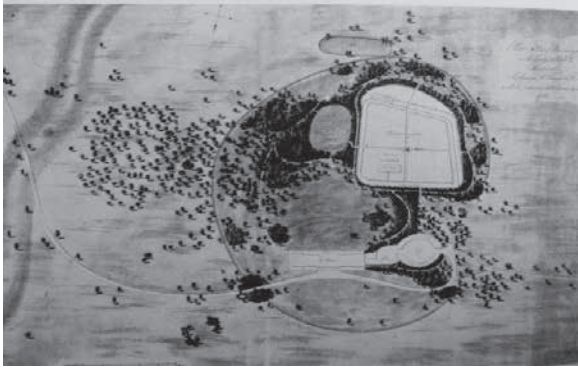


図5 William Mason Flower Garden, map from *Mason's Garden Today* in Mavis Batey, *Nuneham Courtenay Oxfordshire* (Abingdon: The Abbey Press, 1979) n.p.



図6 *A Section from Brown's Plans for The River*, drawing from Heveningham; in Dorothy Stroud, *Capability Brown* (London: Country Life Ltd, 1965) 204.



☒ 7 *Plans for The Grounds near The House*, drawing from *Heveningham*; in Dorothy Stroud, *Capability Brown* (London: Country Life Ltd, 1965) 204.



☒ 8 Heveningham House Garden, mezzotint from *A Contemporary Engraving of The House and Park*; in Dorothy Stroud, *Capability Brown* (London: Country Life Ltd, 1965) 205.



☒ 9 Nuneham Courtenay, c. 1780, painting from Paul Sadby; in Dorothy Stroud, *Capability Brown* (London: Country Life Ltd, 1965) 206.